



## バーゼルワールド2010

パテック フィリップ ジュネーブ  
2010年3月

### パテック フィリップにおけるクロノグラフの歴史

コンプリケートド・ウォッチの巨匠パテックフィリップの広範なレパートリーにおいて、クロノグラフは常に中心的な位置を占めてきた。創業後数年にして、パテックフィリップは短時間の時間計測の分野に大きな関心を寄せたのである。150年をこえる歴史において、パテック フィリップは驚異的な数のクロノグラフを創作してきたが、これらは今日、愛好家、コレクターの最も追い求めるタイムピースとなっている。その中には世界各国の博物館に所蔵されているものも多いが、これらはあまりに希少なため、個人による入手はまず不可能である。

### 150年以上にわたる技術とノウハウの蓄積

パテック フィリップの最古のクロノグラフのひとつが、1856年製作の懐中時計No. 10 051である。中央クロノグラフ秒針とジャンピング・セコンドを備え、すでに1/4秒単位で時間計測が可能であった。しかしゼロ復帰のためのシステムを備えていなかったため、時間計測を開始する度に鍵を用いて表示をゼロに戻してやる必要があった。

十九世紀中頃からは、クロノグラフ・ムーブメントの製作が一群のメーカーによって専門的に行なわれるようになってきた。そのひとつがヴィクトラン・ピゲ (Victorin Piguet) である。1880年にジュネーブで創立されたこのメーカーは、3年後にジュネーブに移転し、次第に最も複雑なコンプリケーション・ムーブメントの製造センターとして頭角を現して行く。ヴィクトラン・ピゲはパテック フィリップときわめて親しい関係にあり、このためパテック フィリップの歴史において最も複雑なタイムピースのエポージュ (素材ムーブメント) を製作するという名誉を与えられたのであった。しかし機構上の変更や、面取り、ペルラージュ、コート・ド・ジュネーブ、ポリッシュ仕上げなどの手仕上げは、すべてパテック フィリップの自社工房において行なわれたのである。

### パテック フィリップの最初の腕時計クロノグラフ

1923年、パテック フィリップは、懐中時計用の小型のエポージュを使用して、最初の腕時計クロノグラフ (スプリット秒針付) を創作した。1927年頃からは、腕時計クロノグラフ (スプリット秒針付またはスプリット秒針なし) のシリーズ生産を開始した。アール・デコ・スタイルのケースはラウンド型、スクエア型、レクタングラー型、トノー型、クッション型など、バリエーションに富むものであった。スプリット秒針のつかないモデルは、《モノプッシュボタン》または《3フェイズ》式と称される形式のものであった。これは、リュウズに組込まれたプッシュボタンを押すことにより、スタート、ストップ、ゼロ復帰の3操作をこの順序で行なうものである。これらのムーブメントは、クロノグラフ制御にコラムホイールを用いており、コラムホイールはシャポー (カバー) で覆われていた。シャポーは今日に至るまでパテック フィリップ・クロノグラフの特徴をなすものであり、パテック フィリップの最新のクロノグラフ・キャリバーでは、このシャポーに新しい機能が与えられている。動力の伝達はクラシックな歯車による水平クラッチ式を採用し、ゼロ復帰はハートカムによる。コラムホイールはこれら一連の動作を制御する。パテック フィリップがエポージュの各々の構成部品を完璧に仕上げ直し、これを真のマスターピースに変身させたことはいうまでもない。受け



(ブリッジ) とスチール部品には面取りを施し、縁にはポリッシュ仕上げを行なう。表面にはコート・ド・ジュネーブ、ペルラージュなどの装飾を加える。ネジ頭の外周と溝にも面取りを施し、カナ歯車の歯はひとつひとつブナのディスクにより磨き上げ、端面は青銅製の回転体により磨き上げる。これらの細心の配慮を注いだ手作業のため、パテック フィリップの腕時計クロノグラフの製造個数は限られたものとならざるを得ない。それが鑑識眼の高い愛好家、コレクターたちに追い求められる理由でもある。

## 新たなオーナーと新しいクロノグラフ・ムーブメント

1930年代に入ると、パテック フィリップの腕時計クロノグラフは黄金時代を迎え、それは今日まで続くことになる。1932年、パテック フィリップは重要な転機を迎える。この年、シャルル、ジャン・スターン兄弟が創業家族から経営を引き継いだのである。パテック フィリップがアメリカ合衆国において実施した市場調査の結果、クロノグラフの有望性が明らかとなった。1934年、パテック フィリップは130モデルを発表した。2時位置と4時位置に角型プッシュボタンを持つこのクロノグラフは、その後の腕時計クロノグラフのスタイルを決定した。腕時計クロノグラフ製造の長期的に強固な基盤を確立するため、新しいオーナーと技術部長ジャン・フィスターは、クロノグラフのエポーション(素材ムーブメント)の供給元を研究した。その結果、ジュー峡谷のクロノグラフ専門メーカー、レイモン・フレール (Reymond Frères, 1929年からヴァルジューSA - Valjoux SA - と社名を改める) が製造するコラムホイール・キャリバー、23VZの存在を見出した。厚さ5・85ミリ、直径13リーニュのキャリバー23VZは、当時の腕時計用として最適のサイズであった。キャリバー23VZは、パテックフィリップ哲学に則り、そのメカニズム全体が見直されたのである。ガンギ車、クロノグラフ駆動車には、それぞれ個別の受けが設けられた。緩急針には微調整を可能にする優雅なスワンネックが加えられた。1939年、パテック フィリップによって完全に改修されたヴァルジューを搭載した初のパテック フィリップ・クロノグラフが発表される。以後52年間の長きにわたり、この完璧なムーブメントは、パテックフィリップのキャリバー・コレクションの欠くべからざる一員として君臨し続けることになる。前述の130モデル、スプリット秒針クロノグラフ1436モデル、永久カレンダー1518、2499モデル、永久カレンダー搭載スプリット秒針クロノグラフ2571モデルなどに搭載され、1940年には、ルイ・コティエによる著名なワールドタイム機構を組み込んだモデルさえ登場したのである。これらは今日では、世界各国のオークション会場で見ることができるのみである。

自動巻クロノグラフの時代が始まって5年後の1974年、ヴァルジューは、この伝説的なエポーションの製造を不本意ながら終了する。製造元ストックが尽きた1982年、キャリバー23VZは、最終的にその栄光の歴史を閉じた。しかしパテックフィリップは豊富な数のエポーションを保有しており、自社のストックが切れる1985年まで永久カレンダー・クロノグラフ2499モデルに限って搭載され続けた。もちろん後継者の名にふさわしいキャリバーの開発が開始されていた。そして新たなエポーションのサプライヤーとして抜擢されたのが、やはりジュー峡谷のヌーヴェル・レマニア (Nouvelle Lémania SA) であった。こうしてキャリバーCH 27-70の時代が始まったのである。

## パテック フィリップの高級クロノグラフの代名詞となったキャリバーCH 27-70

コラムホイール制御、歯車による水平クラッチ式の手巻キャリバーCH 27-70は、クラシックなクロノグラフにふさわしいすべての特徴を備えていた。しかしこのエポーションも、パテック フィリップの厳格な自社規準に準拠して全面的な修正、改良を加えられたのである。ほとんどすべての構成部品には変更が加えられ、すべての仕上げ、組み立て、調整、検査はパテックフィリップ工房で行われた。ガンギ車、4番車受け、クロノグラフ受け、クラッチレバーの形状と回転軸位置などのデザイン変更は、いずれも1923年以降のパテックフィリップの著名なクロノグラフの伝統に準拠し



て行われたのである。またトルクを最適化するため、複雑な力学的測定が行われた。同じ目的で歯車の歯型曲線も新たにデザインされた。その結果、輪列の減速比が改良され、手巻クロノグラフとしては驚異的な、オリジナル・キャリバーを10時間以上上回る60時間の連続駆動可能時間を達成したのであった。特許取得のジャイロマックス・テンプと緩急針を持たないフリースプリング・ブレゲ髭ぜんまいの組み合わせも特筆に値する。毎時18,000振動（片道）で5分の1秒単位の計測が可能である。これらの技術的改良に加え、各々の構成部品には面取り、縁のポリッシュ仕上げ、側面のヘアライン仕上げ、コート・ド・ジュネーブ装飾など、パテック フィリップ独自の仕上げが施された。当時のすべてのパテック フィリップの機械式ムーブメントと同じく、CH27-70はジュネーブ・シールを刻印されていた。

1986年には、永久カレンダーを加えたキャリバーCH27-70 Qが完成し、3970モデルに搭載された。このキャリバーは世界で最も美しいクロノグラフ・ムーブメントという定評を与えられ、多くの愛好家、コレクターは、実物を手にするまで数年間も辛抱強く待つのが通例であった。1998年にはクロノグラフのみを搭載したピュアなラインの5070モデルが発表された。パテック フィリップが完全自社開発・製造の新しいクロノグラフ・ムーブメントを開発中であるという噂がこの頃より広まった。

### 独立マニュファクチュールの完全自社開発・製造クロノグラフ・ムーブメント

事実、パテック フィリップは完全自社開発・製造のクロノグラフ・ムーブメントの開発を開始していた。その意図するところは、独立の保持とクロノグラフ製造の垂直的統合であった。しかしこのプロセスが具体化するのには、二十一世紀に入ってからであり、方向性の異なるいくつかのプロジェクトが同時進行した。ひとつは、キャリバーCH27-70の後継機種として、クラシックなクロノグラフ・ムーブメントを開発すること、今ひとつは自動巻、垂直クラッチという現代的なアーキテクチャーを持つクロノグラフ・ムーブメントの実現であった。

第一幕。2005年。超薄型シングルプッシュボタン・スプリット秒針クロノグラフ5959モデルがバーゼルワールドで発表された。このニューモデルに搭載されたキャリバーCHR 27-525PSは、世界で最も薄いコラムホイール式スプリット秒針クロノグラフである（厚さ5.25 mm）。グランド・コンプリケーション工房で一個一個手づくりされるこのキャリバーCHR 27-525 PSは、クロノグラフ輪列の歯車にパテック フィリップが開発し、特許を取得した新しい歯型曲線を採用し、エネルギー効率を向上させ、摩擦を軽減している。キャリバーCHR 27-525PSはまた、パテック フィリップが完全自社開発・製造する初のクロノグラフ・ムーブメントである。

第二幕。2006年。キャリバーCH27-70の後継機種への期待はますます高まっていた。しかしパテック フィリップは1月、年次カレンダー搭載クロノグラフ5960Pモデルを発表して世界を驚愕させた。自動巻、年次カレンダー、垂直クラッチ、60分計、12時間計一体型クロノグラフ・サブダイヤルという際立った特徴を備えたキャリバーCH28-520 IRM QA 24Hは、やはりパテック フィリップ完全自社開発・製造のまったく新しいクロノグラフ・ムーブメントである。

第三幕。2009年。愛好家、コレクターの間で10年来囁かれてきた噂が、ついに現実のものとなる日が来た。11月、大規模な改築・改装工事が完成したパテック フィリップ・パリ・サロン（ヴァンドーム広場）の新装オープンを機会に、パテック フィリップは新しいクロノグラフ・ムーブメント、キャリバーCH 29-535 PSを発表した。パテック フィリップが完全自社開発・製造する初の手巻、コラムホイール制御のクラシックなクロノグラフ・ムーブメントである。こうしてパテック フィリップは、そのすべての現行コレクションに必要なムーブメントの製造を完全に自社の工房に統合するに至ったのである。キャリバーCH 29-535 PSは、6件の技術特許により保護された技術革新を含んでいる。



《報道資料》 ページ 4

そのひとつは、キャリバーCHR 27-525において初めて採用された、パテック フィリップ独自のクロノグラフ輪列の新しい歯車曲線である。もちろんキャリバーCH 29-535 PSは、2009年に創設され、すべてのパテック フィリップ・タイムピースの究極の品質を保証する、パテック フィリップ・シールを刻印されている。

《本資料に関するお問い合わせ先》

PP Japan 株式会社

パテック フィリップ ジャパン

A D & P R ディレクター

丸山和泉

電 話：03-5209-8018 (直通)

F A X：03-3256-7558

maruyama@ppjapan.com

《ご掲載いただく場合の読者お問い合わせ先》

パテック フィリップ ジャパン・インフォメーションセンター

電 話：03-3255-8109

パテック フィリップ ホームページ

<http://www.patek.com> (英語)

